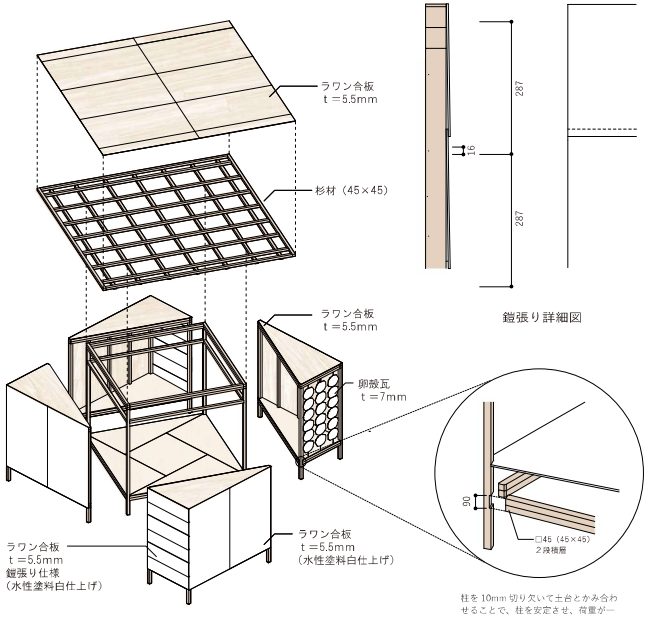


n 庵　-木をうごかす n通りの茶会のかたち-

木は、構造から建具、家具まで、人の営みに寄り添いながら建築をつくってきた素材である。n 庵では、その木の身体的なスケールと軽やかさを活かし、**4 つの木のユニットを人の手で動かせる茶室**とした。人数や所作、人との距離に応じてユニットが動くことで、閉じた茶会から開かれた茶会へと空間が変化する。木だからこそ生まれる「動き」を通して、n 通りの茶会のあり方を提案する。

■ 二畳半と 4 つのユニット

中央の茶室を基準に屋根を 600mm ずつ拡張する
ユニットを開いた際にも通路の上に屋根が生まれる



アイソメ図

2 つのユニットの短辺を鎧張りとし、裏表を白く塗装することで、木の連続による空間の単調さを抑え、ユニットの動きが生み出す境界の変化を際立たせる。

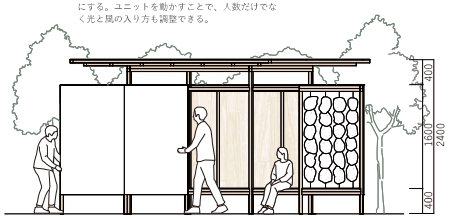
鎧張り詳細図

柱を 10mm 切り欠いて土台とかみ合わせることで、柱を安定させ、荷重が一点に集中することを防ぐ

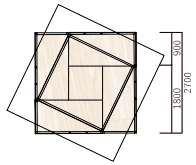
延床面積：7.29 ㎡（最大時）

4 ユニットを組み合わせることで、約 7.29 ㎡の茶室を構成する。4 つのユニットを移動・展開することで、中央の約 4.05 ㎡を核とした異なる空間構成へ変化する。

ユニットは 3 人で運搬でき、設置・撤去を容易にする。ユニットを動かすことで、人数だけでなく光と風の入り方も調整できる。

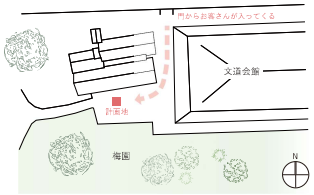


立面図 S＝1：60



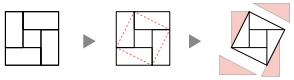
平面図 S＝1：100

01｜敷地　北野天満宮



「**北野大茶会**」は、茶室という限られた空間の中で行われていた茶の営みを、境内という大きなスケールへと開いた出来事であった。かつて北野大茶会によって茶が境内へと開かれたように、四畳半という単位を展開することで、茶室を境内との関係の中へ開いていく。

02｜『四畳半』の展開



茶室の基本的な空間単位である「**四畳半**」に着目し、その平面を一つの完結した空間としてではなく、周囲へ展開可能な単位として捉えた。中心の半畳を起点に 4 方向に分割することにより、柔軟な茶室に対応しうる可変性を持たせた。

03｜木をうごかす



木は、柱や梁から建具や家具まで、**人の身体に近いところで建築をつくってきた素材**である。茶室でも、躙口や障子、炉など、人の所作を受け止める要素として用いられてきた。n 庵では、木を仕上げ材ではなく、人の動きに応答する建築の要素として捉え、手で動かせるスケールから、茶室そのものが変化する構成を導いた。

04｜卵殻瓦（エッグシェルペーパー）　-日常の痕跡-

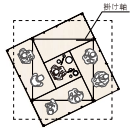


京都では、多くの食文化や日常の営みの中で卵が消費されている。一方で、卵の殻は役目を終えた瞬間に「廃棄物」として扱われる。卵殻を単なる再利用素材として扱うのではなく、日常の中で生まれる小さな痕跡を、建築を構成する単位へと変換することを試みた。

05｜n通りの茶会のかたち

n＝とじる　おこもり庵

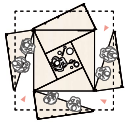




中央の茶室を4つのユニットで閉じ、4畳半の座礼式の茶室をつくる。壁が迫った密閉された空間ながらもユニットと中央の茶室の高低差で生まれる採光が、茶室を柔らかく照らす。（定員 1～8名）

n＝ひねる　プロペラ庵

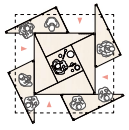




4つのユニットを45度ひねる。そうすることで茶会での亭主と客の境界を妨げずに、お運びさんが茶室に入る動線を確保することができる立礼式の茶室になる。（定員 1～6名）

n＝ずらす　卍庵





4つのユニットを900mm外側へずらすことで茶室の内と外が連続的に繋がる風通しの良い茶室が生まれる。座礼式と立礼式の両方の性質を持つことで、客によって柔軟な対応ができる。（定員 1～7名）

n＝ひらく　こしかけ庵

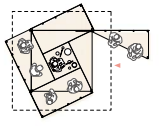




4つのユニットを中央の茶室から450mm外側へ開くことでどこからでも出入りすることのできる立礼式の茶室をつくる。離れながらも大きな屋根と統一された内壁が空間を外へと開く。（定員 1～9名）

n＝めくる　まく庵

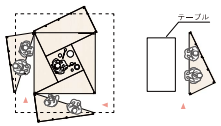




1つのユニットを90度外側へ開くことで、お運びさんが茶室へ入りやすくなるとともに、茶会の様子を外からも見ることのできる、劇場型の茶室となる。（定員 1～6名）

n＝はなす　バラバラ庵





1つのユニットを既存のベンチの場所まで離すことでもう1つの茶会場所が生まれる。（定員 1～7名）